

The book cover features a complex marbled pattern in shades of grey, black, and white. A central white rectangular label with a decorative border contains the title and author information. At the bottom of the cover, there is a faint illustration of a spiral-bound notebook and a pair of light-colored shoes.

おらんだ帽子

三浦哲郎

新潮社版

おらんだ帽子^{ぼうし}



著者 三浦哲郎（みうらてつお）

昭和五十二年十月十日発行

昭和五十三年六月二十日三刷

発行者 佐藤亮一

印刷所 二光印刷株式会社 製本所 新宿加藤製本

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(286)五一一一 編集〇三(286)五四一一

定価 九八〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

おらんだ帽子

7

離郷

27

頬紅

45

雉子撃ち

65

木靴

83

村娘

105

トリ婆さんの卵

127

お凜

143

風の笛

159

わらべ唄

175

白鳩

193

メンデルの春

203

装画／下田義寛

お
ら
ん
だ
帽
子

おらんだ帽子

一

最初、私たちはおふくろの身になにが起こったのかわからなかった。

ただ背中に悪寒がして、左の目のまわりがちくちく痛むというだけでは、それがなんのせいなのか、なんの前触れなのか見当もつかない。

「……風邪をひいたのよね、きつと。こっちはまだ朝晩冷え込むのに、足袋も履かないで板の間を歩いたりするんだから。腰が立つようになってからは、もう、じっと寝ていてくれないのよ。起きて歩きたがって、仕様がないの。」

四月の初旬に、次女が無事に中学校の入学式を済ませたことを郷里へ電話で知らせてやったとき、独りでおふくろの面倒をみている姉は困ったようにそういった。

そんなことなら、おそらくただの風邪だろう。左目のまわりが痛むというのも、風邪からくる偏頭痛のせいにちがいない。私はそう思っただけで、

「でも、また歩けるようになって、よかったじゃないの。」

といった。

おふくろは、六月がくれば八十四になるが、去年の暮から寒さに腰をやられて寝込んでいて、私たちは、このまま寝たきりになってしまふのではないかとおそれていたのだ。

「そりゃあ歩けるようになったのは心強いけど、今度は危っかしくて目が離せないのよ。寝たきりのときより却って気疲れがするわ。」

姉は五十を過ぎてまだ独身だが、まるで自分の子供のことにそういう口振りがおかしかつた。生まれつき目の不自由な琴弾きの姉には、おふくろを子供扱いにして愚痴をこぼしながらも小まめに面倒をみることで、世間の母親の気持をひそかに味わって楽しんでいるようなところがあった。

まあ、大事に、といって電話を切ろうとすると、

「大丈夫よ。さつきも梅干湯を飲ませたから。」

姉は笑ってそういった。梅干湯というのは、子供のころ風邪をひくたびに飲まれた梅干入りの砂糖湯で、私は聞いただけで口に唾が湧いてきた。

ところが、一日置いて、姉の方から、なんだか様子が変だといってきた。

「あれから熱が出て、きょうは三十八度もあるの。目のまわりの痛みもだんだんひろがって、こめかみ顱額から頭の方まで痛むんだって。どうも、ただの風邪じゃないみたいよ。」

そういわれても、私にはやはり普通の風邪が重くなつて、偏頭痛がひどくなつてきたのだとしか思えなかった。

「痛むのは、左側だけなの？」

「そうなの。そこが変でしょう。」

「変でもない。偏頭痛は片側だけが痛むんだから。」

「ところが、頭痛じゃないっていうのよ。普通の頭痛とは、痛み方がまるでちがうんだって。」すると、どんな痛み方をするのだろう。

「蜂に刺されて腫れ上ったときの痛さに似ているっていうんだけど。わかる？」

「それはわかる。」と私はいった。「そこらじゅうに、細かな針をぎっしり詰め込まれたような痛さだよ。神経という神経の先っぽの方まで毒がまわつて、誰かが指を近づけただけで一斉に騒ぎ出すような、そんな痛さだ。」

「それが、諸井先生にはわからないのね、残念ながら。」

と、姉はおふくろの掛かりつけの医者のことをそういった。おふくろはもう随分前からその医者に故障がちな心臓を診て貰つていて、腰で寝込んでからは週に二度の往診を頼んでその方の手当もして貰つていたが、生憎その医者は蜂に刺された経験がないらしい。

「こつちもうまく説明できないんだけど、そんな痛み方が先生によくわかつて貰えないのよ。」
「痛み方とはかく、どうして痛むかぐらいはわかりそうなものだがね、医者なら。」

「それが、はつきりしたことはわからないんだって。風邪だと思うけど、ひょっとしたら神経痛の注射の副作用かもしれないっていうの。強い薬を使ってるから。とにかく、もうすこし様子を見ましようってお帰りになったけど。」

「そんなら、こっちも様子をみるほかないね。」

と私はいった。

翌日、姉はまた電話をかけてきた。

「顔の左側が腫れてきたの。それで、よくみると、顚顚の生え際のあたりに、水ぶくれができてのよ、いつのまにか。」

「水ぶくれが？」

「粟粒みたいな水ぶくれだけど、それが、ばらっと、幾つもできてるの。」

姉は心配で、腫れたおふくろの顔に何度も不自由な目を近寄せているうちに、やっとその水ぶくれをみつけたのだ。発熱して水ぶくれができるといえば、子供が罹る水疱瘡に似ているが、「まさか、いまごろになって水疱瘡でもなからうしね。」

「でも、大人になってからの水疱瘡って、怖いでしょう。うちへお稽古にきていた油屋の奥さん、三十幾つになってから水疱瘡に罹って、亡くなったものね。口のなかから内臓の方まで、びっしり水ぶくれができたんだって。それがあるから心配になって、念を押してみたら、馬鹿にするなど怒るのよ、うちのお年寄り。そんなものはもう八十年も前に済ませたっていうの。」

水疱瘡でないとすれば、なんの水ぶくれだろう。

二

翌日になると、その水ぶくれが顚顚ばかりではなく、頭の方にまでひろがっていることがわかった。

「髪が薄くなって、地肌がよくみえるからわかったんだけど、顚顚からずっと帯のようにつづいてできてるの。ひどく痛むところを追いかけるようにして水ぶくれができてみたい。逆にいえば、水ぶくれができる前がひどく痛むらしいのよ。」

「初めにできた水ぶくれは？」

「だんだん大きくなるみたい。数が減ったから、幾つかがくつつき合って一つの大きな水ぶくれになるのね。そんなふうにして、どんどん水ぶくれが増えていったら……。」

いまにおふくろの顔と頭は、水ぶくれが潰れたあとの瘡蓋かさぶたで覆われてしまうだろう。姉は独りで、誰も話相手がいないから、いちいち私に電話で報告してくるのだが、私にしても、それから先はどうなるものやら見当がつかなかった。

「やっぱり医者じゃないとねえ。諸井さんはまだその水ぶくれは診てないわけだね。」

「そうなの。こっちは気が気じゃないんだけど、諸井さん以外のお医者は厭だっていうのよ。」

明日が往診日だから、晩にでもまた報告するわ。」

姉はそういつて電話を切ったが、翌晩、やつと病名がわかったといつて知らせてくれた。

「ヘルペスですつて。」

私は、舌が縫れたような姉の言葉を二度訊き返して、おふくろがヘルペスという耳馴れない病気に罹っているのだとわかった。

「これは外科の分野だからつて、心臓の大家も自信なさそうだったけど、まずヘルペスに間違いないだろうつていうの。」

「そんな病気があつたのか。どういうたぐいの病気だろう。」

「なんでも神経を冒す病氣らしいの。だから、痛みも水ぶくれも神経を伝つてひろがつていくのね。でも、命に関わるような病氣じゃないつていうから、一と安心だわ。」

姉はそういつて、病人は大変だろうがヘルペスで死んだという話は聞いたことがないから、その点は御心配なくという諸井医師の言葉を伝えてくれた。

「そんならこつちも安心だけど。」と私はいつた。「顔や頭の病氣は、あとが厄介だからね。後遺症の心配はないんだろうか。」

「神経の痛みがすこし残るぐらいですつて。それに、ヘルペスはべつに頭の病氣つてわけじゃないのよ。神経つて軀中にあるでしょう。人によつて出る場所はちがうけど、肋間神経に沿つて胸にぐるつと帯をしたように出るのが一番多いんだつて。」